第2回資源管理方針に関する検討会
（マサバ太平洋系群・ゴマサバ太平洋系群）

１．日程　　令和２年２月２６日（水）～２７日（木）
２．場所　　TKP神田ビジネスセンター
３．出席者
　水産庁：神谷資源管理部長、廣野管理調整課長、魚谷資源管理推進室長、船本漁場資源課補佐、赤塚管理調整課補佐、藤原管理調整課補佐ほか
　水研機構：堀井理事、田中理事、西田中央水研資源研究センター長ほか
　ほか漁業者、漁業者団体、研究者、行政官等計 90 名

４．概要
≪１日目：２月２６日（水）≫
水研機構から資料４－１から４－４を用いて資源評価の更新結果と第１回検討会の指摘事項に対する試算結果について説明し、水産庁から資料５を用いて資源評価の補足説明を行ったのち、質疑応答・意見交換を行った。
【主な意見】
- ゴマサバの漁獲量の将来予測値が大幅に下方修正された原因を説明して欲しい。
- マサバについて、新たな管理の開始後に漁獲可能量が減少しており、違和感がある。
- ゴマサバについて、資源はV字回復すると予測されているが、近年の水準より高い加入量の仮定値を適用することについて疑問がある。
- 新たな管理を始める段階で資源評価の結果が変動することに不安を感じる。
- 親魚量が MSY 水準を上回っている場合は、MSY 水準に減るまで漁獲を増やしてもよいのか。
- 今の基準では資源が低水準期になると漁獲ができなくなる。そのような時期になった場合には見直すべき。
- 目標が従前より高いため短期的には厳しい管理を強いられるが、中長期的には漁獲量は増えていくと捉えてよいか。
- マサバ・ゴマサバ・スケトウダラ・ホッケを優先的に検討する魚種とすることについて、いつの水産政策審議会の資源管理分科会に諮ったのか。
- 資源評価の手法は内部レビュー及び外部レビューを受けているのか。
- マサバは自然変動が大きいためより保守的な考え方が採用されており、それが神戸チャートが歪なもの（全ての評価期間において赤色のゾーンにある）となっている原因と理解している。関係者の理解を得るためにはその点を丁寧に説明すべき。
- 資源管理目標は５年間変えないとのことだが、自然環境の劇的な変化があった場合にはそれまでの間であっても見直すべき。
- 漁獲量だけでなく、利益の最大化の視点も重要。
- 太平洋側のサバ類は漁期年で資源評価を行い、日本海・東シナ海のサバ類は暦年で資源評価を行っているが、どちらが生物学的に正しい手法なのか。
- 資源評価結果と現場の感覚が合わないとの声を聞く。資源管理を行う上で必要なのは現場の漁業者の納得感であると考えており、そうした声に耳を傾けてほしい。

≪2日目：2月27日（木）≫

（1） 水産庁から資料6を用いて漁獲シナリオの検討について説明を行ったのち、質疑応答・意見交換を行った。

【主な意見】

- 定置網は受身の漁業であり、年により漁獲量が変動するため、TAC 管理には柔軟性を持った対応をしていただきたい。
- 日本海・東シナ海サバ類と同様、β＝0.95 の試算は行わないのか。
- 33 万トンしか漁獲の実績がない中、50 万トンを TAC として良いのか。MSY 水準への回復を図るため、また、資源評価の不確実性を考えると、βはもっと下げるべきではないか。
- 日本が損することがないよう、国際管理を巡る議論に際してはしっかり対応して欲しい。また、TAC 数量が下がり実漁獲との「遊び」が少なくなるので、柔軟な運用が図られるようお願いしたい。
- 漁獲シナリオを選択する際には、目標管理基準値を上回る確率以外に、限界管理基準値を下回るリスクも考慮されるべき。
- β＝0.9 ありきの説明に違和感を覚える。これまでの TAC 意見交換会と同じでは。
- すべての年齢構成に均等に漁獲圧力を下げるシナリオだけでなく、日本海・東シナ海サバ類で試算したような若齢漁の漁獲圧力を特に下げるシナリオもあるのでは。
- TAC の上限まで獲り切れないので、βを 1.0 にしても良いのでは。
- ゴマサバは重要な魚だが、伊豆諸島周辺海域の漁獲模様は芳しくない。サバ類として一体管理した場合、結果的にゴマサバが ABC 以上漁獲されてしまい、資源が悪くなることを懸念する。漁獲量の報告はどのようになるのか。マサバ、ゴマサバと分けて報告することは現場の負担が大きい。
- 経済的側面から、漁業者が協定を締結し漁獲量を抑えることは法律上可能なのか。
- サバ類として一体管理する中でゴマサバの漁獲圧力をどう下げていくのか。
- サバ類太平洋の対象海域に鹿児島県が含まれていないが、最近、太平洋系群由来と思われるものが同県の海域で漁獲されている。系群の分け方については、純粋に生物学的な観点から検討して欲しい。
- 業界や地域単位で丁寧な説明をお願いしたい。
- マサバについて、これまで親魚量 154.5 万トンを記録したことはなく、「回復」という言葉が使われていることに違和感を覚える。NPFC における資源評価作業の完了など問題が解決するまで MSY の数字を決定することは見合わせ、継続審議とした方が良い。資源が減少期に入った時や、卓越年級群が発生した時の対応についての議論も必要だ。厳しい措置を提唱する以上は、支援措置も提示して頂く必要がある。対馬暖流系群についても同様。
- 昭和 40 年代当時と比べて資源は減ったと感じている。
- 沿岸の現場でも、独自の漁獲制限や小型魚の再放流、操業時間制限なども行っている。漁業者の経営に影響がでないように配慮して欲しい。

- 日本の前浜でロシア漁船がサバを漁獲している。オブザーバー配乗やドライブレコーダー搭載など操業をモニタリングできるよう交渉して欲しい。
- キンメダイのように標識放流のデータを基に系群を分ければ良いのではないか。
- ロシアや中国がどのような漁獲をしているのか不明とのことだが、漁獲する以上はデータを出すのは当然であり、NPFC においてそのように主張すべき。
- 浜浜で理解が進むよう、丁寧な説明を今後も進めていただきたい。

（2） 最後に、

① 水研より示された管理目標の値
② 漁獲シナリオ（β＝0.90）で算出される総 ABC
③ 総 ABC の全量を日本水域の ABC とする考え方の継続
④ マサバ･ゴマサバの一体管理
⑤ ②～④に基づき算出される 2020 年の日本水域の ABC
⑥ 今後の進め方（パブリックコメントを実施したのち、本年5月下旬の資源管理分科会への諮問･答申を経て本資源の資源管理の目標と漁獲シナリオを含む資源管理基本方針を決定していくこと、2020 年の TAC の数量も同じスケジュールで決定していくこと）

について、資料を再度説明し、水産庁の考え方に対する確認を求めた。出席者の異論無く、水産庁として上記を進めていく旨発言の上、会議を終了した。

（3） このほか、水産庁より、出席者からの意見を踏まえ、ゴマサバ太平洋系群の資源状況が悪化した場合の対応について今後検討する考えを示した。

以上